Vol.2016-IFAT-122 No.10
Vol.2016-DC-101 No.10
2016/3/24

説文小篆の字形差はどのように研究されてきたか -徐鍇の著作の場合-

鈴木　俊哉[†1]　　鈴木　敦[†2]　　菅谷　克行[†2]

2014 年 9 月の ISO/IEC JTC1/SC2/WG2 会議にて、ISO/IEC 10646 への説文小篆の追加提案が行われた[1]。当初の構想では説文解字のいくつかの版本を整理し[2]、版本ごとの異体字は連続した符号位置になるように並べるものであった[3]。しかし、2015 年 10 月の WG2 会議では、この計画は単一の版本(藤花榭本)に基づいた単なるフォント作成に縮小されており[4]、さらに異体字は将来的には別字符号化すればよいが、当初の計画のように連続した符号位置になるような空き符号位置は予約しないため、すべて後ろの符号位置にすればよいという設計に変わっていた。説文小篆は古漢字の中でも最も研究者内外の利用者が多く、典拠資料数が少ないものの筈だが、説文小篆に関する文字同定基準もまた頓挫した甲骨文字の標準化と同様に不明なままなのである。本稿では、説文小篆の異体字整理の一環として、徐鍇による『説文解字繫傳』および『説文解字篆韻譜』の小篆字形の字形差にどのような研究的興味をもたれてきたかを概観し、説文小篆の標準文字符号化に際する統合規準の検討材料としたい。

How the glyph shape differences have been studied for Small Seal script? - the case study for the works by Xu Kai -

suzuki toshiya[†1]　Atsushi Suzuki[†2]　Katsuyuki Sugaya[†2]

On September 2014, Chinese and Taiwanese experts submitted their proposal to include Shuowen Small Seal into ISO/IEC 10646. Their proposal on 2014 was designed to be a merged collection of major version of Shuowen Jiezi, and the per-version variants are expected to be placed at continuous codepoints. But the revised submission on 2015, the project was reduced to be a simple font production based on one version of Shuowen Jiezi. Also it removed the discussion how to handle per-version variants from the submission. As a result, the project to standardize Shuowen Jiezi is either lacking the criteria for the unification, as ceased project for Oracle Bone, in spite of the situation that the user community of Shuowen Small Seal is the largest one of the Old Hanzi users. In this report, as a case study, we summarize the history how the variant glyphs in the works by Xu Kai have been studied, and try to provide the sources to draft the unification rules for Small Seal script.

1 はじめに

『説文解字』は 100 年頃に後漢の許慎によって書かれた、漢字字書としてはほぼ最古のものである。許慎は字義の解釈のため、当時通行していた隷書ではなく、象形的な性格が残る小篆字形を用いた。より古い甲骨資料を得ている現代では、小篆に基づいた議論に限界があることは明らかだが、現代漢字では古漢字を指示できないという標準化提案の動機は許慎の意識とも共通しているといえるかもしれない。現在見ることができる説文は 900 年ほど後の宋代の刊本で、五代末の南唐から宋にかけての学者である徐鉉(大徐)が校訂した版(一般に大徐本と呼ばれる)である。現在説文解字として広く参照されているのはこの宋刊本か、さもなければこれを底本にした明末以降の翻刻本や校訂本である[1]。

1.1 説文小篆の文字コード化とその活用範囲

2012 年に中断した甲骨文字の標準化計画において「何を目的とする標準化なので、どのような機能が実現できなければならないか」明らかになることはなかったが[15]、説文小篆の標準化においてもこの論点はやはり明らかにされていない。具体的に書き出すとすれば、大まかなものとして以下のような目標がありうるだろう。

a)　印刷に用いる小篆字形に対するグリフインデックスの共通化。

現在流通している小篆フォントの相互運用性を高めるため、各実装の字形に対して統合規準を定め、統合された文字集合として標準化する。流通している小篆フォントには現代漢字の符号位置を使うものも多く、異字形セレクタでの対応も十分有力な選択肢と考えられる。

b)　古漢字の研究における説文排列の指標の標準化。

古漢字の整理方法としての説文解字の排列は広く用いられているので、その指標記号を符号化することにも意味があるが、小篆の詳細な字形差などに注目して粒度を細かくすることは逆効果であろう。

c)　『説文解字』研究の道具としての標準化。

古漢字研究よりもさらに目的を限定し、説文学のためだけに標準化するならば文字集合は定め易く、現代漢字と完全に独立な文字符号とする利点も大きい。

本稿では、以上の中から、字形整理基準がもっとも細かくなる可能性がある c)に類する議論を調査することとした。

†1 広島大学 Hiroshima University
†2 茨城大学 Ibaraki University

[1] 日本では『説文解字』の各版本の概要は[5][6]が良く参照される。中国での認識は[7][8]が参考となる。明末清初の汲古閣本については[9][10]、清代の小徐本の流通については[11][12][13]を参照されたい。また以上に漏れる断片について[14]も参照されたい。

ⓒ 2016 Information Processing Society of Japan

2 説文解字研究と字形の議論

甲骨文字発見以前は、説文字形を校訂することが漢字起源研究の正統な手法で、段玉裁のような清朝の学者でも小篆字形を通行本から改める動機があった[16][2]。しかし、甲骨文字発見以降は、説文字形の校訂は漢字の起源への回答にはならないことが明らかとなり、このような動機は失われている。現在の説文字形の議論で、比較的大きな領域となるのは『説文解字繫傳』の研究であろう。

2.1 説文解字繫傳と版本評価

大徐本以外で説文関係資料として最も重要なものの一つが、徐鉉の弟の徐鍇(小徐)が著した『説文解字繫傳』(小徐本と呼ばれる)である。これは大徐本より先に成立し、校訂に関する情報がより多く含まれるので、大徐本の校訂[16][17][3]や、唐代の説文の断片の研究[18][19][4]に用いられた。しかし現在伝わるものは大徐本以後に張次立が校訂したものなので、小徐原本の姿の推定が大きな関心となる。しかし校訂以降の版ですら、宋刊本は本来の説文と独立に徐鍇が編んだ部分(巻 31～40)しか見つかっていない(鉄琴銅剣楼所蔵宋刊残本)。

現在我々が参照可能な小徐本版本としては述古堂本(書写年不明・1919 影印出版)、汪啓叔本(1782 成立・出版)、祁寯藻本(1894 成立・出版)の 3 系統がある。現在もっとも善本とされているのは祁寯藻本である[6][7][12][13]。どれも宋刊本を模写したもの(景宋写本)に基づくものだが、述古堂本は影印出版で、その底本も現存する[13]が、汪啓叔本と祁寯藻本の底本となった写本は既に散逸し、どのような校訂が加わっているのかはっきりしない。東ヶ崎氏による述古堂本・汪啓叔本・祁寯藻本の反切比較結果では述古堂本・汪啓叔本が一致し祁寯藻本が異なるという状況も少なくないという[20][21]。

小徐本の文献学的な研究には以下のようなものがある。朱文藻の『説文繫傳考異』(以下『考異』)は、汪啓叔本の刊行にはじまる清代の小徐本の流通以前に、景宋写本を書き写した朱文藻が大徐本との差異を記録したもの(初版[22], 1770 成立)と、汪啓叔本刊行後に改訂したもの(重校[23], 1806 成立)がある。清代の説文学者の校訂を経ていない景宋写本の状況を伝える資料として貴重である。

この後編まれた、祁寯藻本出版の校訂作業の記録である承培元『説文繫傳校勘記』[24] (以下『校勘記』, 1839 成立)も当時参照可能であった様々な資料を比較している。

さらにこの後に編まれた王筠『説文繫傳校録』[25] (以下、『校録』, 1842 成立[5])は二徐とも多数の版本を参照した精密なものである。ただし、各版本の文中の呼称が一貫しておらず、どの版本にどのような字形差があると報告しているのか、特定が困難な注記も少なくない。

田呉炤の『説文解字二徐箋異』[26] (以下『箋異』, 1910 成立)は上記の先行研究を参照しているが、二徐の比較に重点を置き、調査対象として大徐本は平津館本、小徐本は祁寯藻本にしぼっている。

注意が必要なのは、これらの全体的な版本比較の研究は述古堂本や宋刊残本の影印出版以前のもので、複数の研究者が同一の景宋写本を参照して議論する状況になっていないため、ある研究書が重きを置く写本を他の研究書では疑っている状況もあったことである[27]。

2.2 説文解字篆韻譜とその字形の研究

張次立の校訂以前の版本が無いため、小徐本の原形をさぐる手がかりの一つとなるのが、張次立が校訂していないと考えられる『説文解字篆韻譜』(以下、『篆韻譜』)である。これは簡易に小篆字形を確認するための工具書として、小篆字形を抜き出して切韻系韻書の順序で並べたものである。字注は大幅に削っているため、説文学・文字学の資料としてではなく、廣韻直前の切韻系韻書の構造を知る資料として研究されてきたが[28]、字形に注目したものとして工藤氏・糸原氏による研究がある[29][30][6]。

工藤氏による研究[7]

工藤氏は『箋異』をひき大徐本・小徐本で字形に差異があるとした 13 組の説文小篆について、『篆韻譜』の 10 巻本・5 巻本の 2 つの系列の状況を調べ、より古いとされる 10 巻本は全て小徐本字形に従い、また、5 巻本は大徐本字形に従っている差があるため、10 巻本は大徐本の影響を免れるとした[29]。

糸原氏による研究

糸原氏は、工藤氏の研究に基づき、もし 10 巻本が張次立校訂以前の小徐本の字形を残しているとすれば、現行の小徐本の小篆字形とどの程度異なるかを部首字により調査した[30]。その結果、小徐本と 10 巻本の間には、工藤氏が報告した二徐の差 13 組よりも多数の字形差が見られることから、張次立校訂により小篆字形も多くが大徐本字形に変更されていると論じた。

両研究でカバーされていない問題

糸原氏は、小徐原本の小篆を推定するには『篆韻譜』のが有力な材料であると指摘したが、細かく検討すると三者の参照資料が完全には一致していないため、若干の課題が

[2] よく知られる例では、通行本で「上」の古文とされたものを段注本[16]は篆文とし、新たな古文字形を示す(通行本で「上」の篆文とされたものは削除)例や、大徐本では字形差がない「馬」の古文と籀文に字形差を導入する例がある。
[3] 段は汲古閣の大徐本は小徐本によって改訂されていると指摘した[17]。段自身も一部の小篆字形について大徐本より小徐本の字形が優るとしている。
[4] 巻 36 怯妄編、巻 39 疑義編は唐代の李陽冰刊訂版について詳しく記す。
[5] [25]の底本は 1857 年刻だが、[5]に従った。
[6] 工藤氏以前にも、白川静の著作の中に『篆韻譜』で説文小篆を示したとする例があるが、印刷された字形を見る限り 10 巻本に従わないので、張次立校訂前の小徐字形を示そうとして選んだわけではないようである。
[7] 工藤氏の関心は 10 巻本がどのような材料から成立したかにあり、字注から見た分析が多い。字形に関しては補助的な調査と思われる。

ⓒ 2016 Information Processing Society of Japan

残されていることがわかる。

工藤氏は 10 巻本には大徐本の要素が見られない証拠の一つとして、田が調査した大徐本(平津館本)・小徐本(祁寯藻本)で違いが見られる 13 組について『篆韻譜』と大徐本(四部叢刊岩崎本)・小徐本(述古堂本)の状況を調査し、底本が異なっても田の報告と整合する結果を得た。続く糸原氏の大徐本(汲古閣本)・小徐本(述古堂本)の比較では二徐の部首レベルで字形差があるものが合計で 23 部首[8]あったのだが、これに似た傾向を工藤氏は報告していないのである。

- 糸原氏と田では比較した版本が重なっていないため[9]。
- 糸原氏と田では字形同定基準が異なるため[10]。
- 工藤氏が何らかの基準で字形差があるものを絞り込んでおり、13 組は字形差がある文字の全数ではない[11]。

などの可能性が考えられるが、いずれにせよ、工藤氏の 13 組と糸原氏の 23 組という数値の比較は、もう少し複雑な問題と思われる。

2.3 本稿の検討範囲

以上を踏まえて、本稿では、大徐本は早稲田大学所蔵汲古閣本(五次修改本)・續古逸叢書影印岩崎本、小徐本は四部叢刊影印述古堂本・華文書局影印祁寯藻本(道光 19 年版)、『篆韻譜』は早稲田大学所蔵馮桂芬本の部首字を切り出し、糸原氏の調査、「疑義」編、『考異』、『校勘記』、『校録』での言及があるものを並べ、「字形差がある」と判断された文字の集合はどの程度一致するのか、また、一致しないとすればそれを基準の粗密による違いとして一次元的に整理できるか、さらに字形差が伝写の際に維持されているかを検討したい。

ここで、東ヶ崎氏より本稿の動機となった重要な示唆を受けたので記しておく。前述のように、小徐本の宋刊残本(鉄琴銅剣楼本)は巻 31 以降の小徐自身が編んだ部分しか伝わらない。しかし、その部分でも部首字であれば大半を載せているのである。現行の四部叢刊では巻 31 以降はこの宋刊残本を示すが、初版本ではこの部分も述古堂写本を用いていた。これを組み合わせると、多くの部首字に関しては宋刊残本と景宋写本の比較ができるのである[12]。また、祁寯藻本の巻 31 以降は、この宋刊残本を見た上で翻刻されているため、翻刻者がどの程度の字形差あるいは字形修正を是としていたかを知ることができる。そこで、小徐本は本編だけではなく、巻 29 が含む部首一覧、巻 31-32 の「部敘」編に見える部首字も切り出した。大徐本も参考として岩崎本は巻 15 の部首一覧を加えた。

3 調査結果

調査した部首字のうち、糸原氏の調査と先行研究(小徐本の巻 39「疑義」編、『考異』、『校録』、『校勘記』)で何らかの言及があるものを表 1 に示した。紙幅の制限から、字形差の言及があっても本稿で作成した表で字形差が示せないもの(たとえば、汪啓叔本にのみ見える字形や、王筠が朱竹君本にのみ見えると報告するもの)は省略した。また、本稿は先行研究が触れていないが字形差が見えるものについても省略しているので、表が「二徐に見える字形差を改めて調査して網羅したもの」ではないことに注意されたい。また、糸原氏が字形差を報告したものに限り、『篆韻譜』の字形も示すが、これは[30]の隷定字をもとに新たに採ったものなので、糸原氏が判断材料とは若干の異同がある可能性を残す[13]。

3.1 糸原氏と先行研究の字形差判別基準の比較

本節で①～⑤の種別番号は糸原氏の調査[30]にならう。単純に予測すれば、二徐に差がない群、

①二徐・篆韻譜が全て合致するもの(大徐＝小徐＝篆韻譜)
③二徐に差がないもの(大徐＝小徐≠篆韻譜)

は、先行研究では言及がなく、一方二徐に差がある群、

②小徐と篆韻譜だけは合致するもの(大徐≠小徐＝篆韻譜)
④大徐と篆韻譜だけは合致するもの(大徐＝篆韻譜≠小徐)
⑤どれも異なるもの(大徐≠小徐≠篆韻譜)

には言及があることが期待される。本稿での調査結果で、上記の予想を満たすものをグループの総数とともに示せば、

①で先行研究が言及しないもの	454/481
②で先行研究が言及するもの	4/6
③で先行研究が言及しないもの	15/23
④で先行研究が言及するもの	1/11
⑤で先行研究が言及するもの	3/6

となり、①②③⑤に関しては半分以上整合するが、④はあまり整合していない。前節で述べたように、先行研究は述古堂本が影印出版される前のものなので、述古堂本特有の字形差のために糸原氏が④に分類したものは先行研究が言及しないことは合理的だが、1 つの例外は鹿(19.03)である。糸原氏は述古堂本と大徐本が異なり、祁寯藻本は大徐本に一致すると記すが、先行研究や筆者の調査ではむしろ述古堂本と祁寯藻本の字形が一致して大徐本と異なるように思われる[14]。しかし、宋刊残本は大徐本字形を示すので、糸原氏の分類は結果として支持されるだろう。

糸原氏の議論の基盤となる③はどうであろうか。二徐に字形差がないとして報告がないことが期待されるが、予想

[8] 後述するグループ②(6 部首)、④(11 部首)、⑤(6 部首)の合計である。
[9] 糸原氏は大徐本と述古堂本に見える字形差の一部は、祁寯藻本では見えないことを報告している。
[10] 糸原氏も田と同じく平津館本と祁寯藻本を比較した結果、田が報告していない字形差「㪅」を見つけている[30]。『校録』もこれを報告している。
[11] 工藤氏は「字形について両者の見解に相違がある文字が全部で十三例ある。」と書いているところから、単に字形差が報告されたものではなく、二徐の字注のうち字形に係る文言に差があるものを選んでいる可能性がある。
[12] もちろん、述古堂本がこの宋刊残本を写したものであるとは全く言えないが、述古堂特有の字形は宋刊本に由来するかどうかを推定する助けにはなるであろう。
[13] [30]では字形差の典型例にのみ『篆韻譜』字形と解説が示されている。
[14] 祁寯藻本道光版にも汲古閣本初印問題[9][10]に似た問題がある可能性が指摘されている[27]。この論文をご紹介くださった坂内氏に感謝したい。

ⓒ 2016 Information Processing Society of Japan

に反する報告が 8 個出ている。紙幅の都合上、全てについて個別の検討を書くことができないが、而(18.12)、能(19.11)、畐(24.19)、男(26.09)、力(26.10)、劦(26.11)などでは小徐本の版本の中には糸原氏の指摘する字形が部分的に見える。民(24.03)については注意が必要である。祁寯藻本は大徐本と異なる字形で一貫している(『篆韻譜』に似る)が、同じものを見たはずの『校勘記』や『箋異』は報告していない[15]。このことは、字形差の判断基準には研究者によりばらつきがあり、糸原氏の基準で全体を検査すると 13 例を越える可能性を示唆している。また、先行研究で報告がないものでも豐(09.24)、畐(10.19) 、六(28.10)のように『篆韻譜』字形が見える場合があった。

また①のうち、28 部首[16]に関しては先行研究が字形差を言及するが、それらは以下のようなものである。

走: 「走」の一番上の横画を上に曲げるか曲げないか[27]。
彳、辶、行: 「イ」の部分を 2 画で書くか、1 画で書くか。
言: 「立」「口」の間の横画を水平に書くか、曲げるか。
肉: 「夂」を明確に折り、カマエから離すかどうか[17]。
革: 中央を箱構えに一と書くか、楕円にするか。
壴: 下側は「豆」なので中央の横画は水平かどうか。
丹: カマエを連続した曲線で書くか、複数の直線で書くか。
鬯: 「※」の 4 点を点で書くか、短い線で書くか。
缶: 縦画が全体を貫くどうか。
肙: 方の下部を「人」につくるか、「刀」につくるか。
耑: 中央の横画は上の「山」に接するかどうか。
七: 「乚」の終端を下に曲げるかどうか。
由: 中央の縦画が飛び出すのか、全体が尖るか。
罙: 「豕」とするか「⿰冖勹灬」とするか。
矢: 2 本の脚を接触するように書くか、離して書くか。
允: 表に図字した字形が正しく 、祁寯藻本は誤りとする。
本: 大が十をどのように囲うか。
夂: 楷書の「人」のように 2 画で書くか、折り線で書くか。
非: これは祁寯藻本の巻 31-32 に見える字形だけが異なる。
門: 門を楷書体のように書くか、向かいあう「戸」か。
厂: 左払いを曲げるか。図示する 2 つは異なるとする 。
氏: 右払いの途中に突出しがあるか。
系: 最初の左払いを左曲げにするか。
它: 中央の空間を縦 3 つに区切るか、丁型に区切るか。
七: 「乚」は右に流れるか、中央に戻すか。
丁: 縦画は貫くかどうか。

以上、非常に細かい字形差を報告したものだが、それでも糸原氏の報告を完全には包含しないのである[18]。字形差を問題にする研究を「細かい・粗い」という尺度で一次元的に整理することは難しいといわざるを得ない。

3.2 同一版本内の字形差および伝写の字形差について

糸原氏が 23 部首の字形差により張次立校訂が小篆字形をも変えていると推定した背景には、部首の字形差が伝写の際にも維持されるという仮定があったと思われる。しかし、小徐本の本編・巻 29・巻 31～32 の部首字を比較すると、一貫していないものも見られる。例えば、筋(08.16)について見ると、二徐に差がなく『篆韻譜』だけが異なる③に分類している。これは、力(26.10)を 2 画で書くか、4 画で書くかに注目したものだが、述古堂本は本編で 4 画だったものが、巻 29 では 2 画になっている。極端な例では丹(10.02)のように同一版本内で全て違うものもある。祁寯藻本でも言(05.12)、欠(16.21)、氏(24.07)、罍(28.14)は一貫しておらず、大徐本でも岩崎本は畐(10.19)や而(18.12)の字形が巻 15 では『篆韻譜』字形に似る例があることを考えると、版本内での字形の統一性や、ある字形差が伝写の際に維持されたかには精査が必要と思われる[19]。

4 まとめ、今後の課題

本稿では、徐鍇の著作における字形差が過去どのように研究されてきたかを概観するため、糸原氏の調査をもとに小徐本の同一版本内の字形差および、「疑義」『考異』『校勘記』『校録』で報告されている字形差を確認した。

その結果、単体の部首字字形のばらつき[20]や、研究者ごとの判断基準の違いがあり、異なる研究者が字形差を数えあげた結果を比較するにはかなりの注意が必要なことがわかった。このことは、微細な字形差に注目して別字符号化をしても運用が困難であることを意味する。これらの字形差は文字符号レベルでは統合し、異字形セレクタを活用したほうが良いと思われる。

最後に『篆韻譜』の字形の研究について述べる。現行の小徐本が全て張次立校訂を受けている状況では、『篆韻譜』から原本の字形を推定する糸原氏の方法は最も妥当なものと思われる。しかし、伝写に伴って発生する字形差と張次立の校訂による字形差の区別には、議論の余地があるだろう。特に田・工藤氏の報告の二徐の字形差 13 組という数字は、版本評価や字形差の判断基準により大きく変わる可能性があり、糸原氏の議論を検証するためには、部首字だけでなく、より多角的な検討が必要であろう。現在、各小徐本および『篆韻譜』の小篆見出し字を得るため画像分解を進めている最中である。

---

[15] 他に、田の調査範囲にあるが『箋異』に見えず、糸原氏が報告するものとしてグループ②の「亞」(28.08)などがある。
[16] 虫、蟲、蚰に関しては『考異』『校録』で報告があるが、底本は全て大徐本で補っていて張次立の字形がないため、糸原氏は対象外としている。
[17] 述古堂本の本編および巻 29、また鉄琴銅剣楼本に見える上部の縦画については報告がないが、資料の流通前の研究のためと思われる。
[18] たとえば『校録』の「飛」(22.16、グループ③)は糸原氏が注目する『篆韻譜』の字形に合致するが、この字形に関して『校録』は何の注記も無く掲出しており、筆者が調査した範囲の小徐本にも見えない。王筠あるいは版刻者はこれをトリビアルなデザイン差と考えたと思われる。
[19] 糸原氏も同じ部首を含む漢字群で部首字形が不統一な場合があることを触れるが、本稿の調査結果では部首字そのものの字形が不統一であった。
[20] 特に述古堂本と祁寯藻本に差がある場合、どちらを採るかは糸原氏も機械的には判定できていないように思われる。

ⓒ 2016 Information Processing Society of Japan

Vol.2016-IFAT-122 No.10
Vol.2016-DC-101 No.10
2016/3/24

表 1: 大徐(汲古閣・岩崎本)、小徐(述古堂本・鉄琴銅剣楼本・祁寯藻本)の部首字と字形差の言及

部首番号は小徐本の巻号と巻内の部首通し番号である。汲本・岩本・述本はそれぞれ汲古閣本、岩崎本、述古堂本の本編を指す。述 31、鉄 31(鉄琴銅剣楼本)、祁 31 は各版本の巻 31–32 から採った部首字を指す。篆韻譜の字形は糸原氏が示した部首を指示する隷定字をもとに新たに採ったものである。

部首番号	隷定	汲本	岩本	岩15	述本	述29	述31	鉄31	祁本	祁29	祁31	糸原調査・篆韻譜	先行研究
03.12	走												『校勘記』『校録』
04.04	彳												『校録』
04.05	辵												『校録』
04.07	行												『校録』
05.04	谷												『校録』
05.12	言												「疑義」
05.16	斝											③	
05.17	粪											③	
06.03	爨											⑤	
06.04	革												『校録』
06.16	畫											⑤ (i)	
06.21	殺											③ (ii)	
06.29	用											③	
07.08	鼻											④	
08.15	肉												「疑義」『校録』
08.16	筋											③	
08.18	刃											④	
09.18	壴												『校録』
09.24	豐											③	
10.01	丶											④	
10.02	丹												『校録』
10.06	鬯												『校録』
10.12	缶												『校録』
10.19	畐											③	

部首番号	隷定	汲本	岩本	岩15	述本	述29	述31	鉄31	祁本	祁29	祁31	糸原調査・篆韻譜	先行研究
12.08	乇											③ (iii)	
12.10	粤											③	
13.04	㫃												『校録』
13.05	冥											⑤	『校録』
13.22	彔											⑤	『校録』
14.02	耑												『校勘記』
14.05	瓠											④	
14.09	穴											③	
15.02	七												『校録』
16.03	老											⑤	
16.10	舟											③	
16.21	欠											②	『考異』(初版)、『校録』
16.22	歙											②	『校録』『考異』(初版)が参照した写本では欠落。
16.23	次											②	『校録』『考異』(初版)が参照した写本では欠落。
17.11	髟											③	『校録』
17.18	卯											④	
17.24	由												『校録』
18.09	長											③	
18.12	而											③	『校録』
18.13	豕											④	
18.18	罙												『校録』
18.20	象											④	
19.02	麂											④	
19.03	鹿											④	『校録』
19.04	麤											④	

ⓒ 2016 Information Processing Society of Japan

Vol.2016-IFAT-122 No.10
Vol.2016-DC-101 No.10
2016/3/24

部首番号	隷定	汲本	岩本	岩15	述本	述29	述31	鉄31	祁本	祁29	祁31	糸原調査・篆韻譜	先行研究
19.05	毘											②	
19.07	莧											④	
19.11	能											③	『校録』
20.04	矢												『校録』
20.06	允												『校録』
20.12	本												『校録』
22.09	夂												『校録』
22.16	飛											③	(『校録』(iv))
22.17	非												『校勘記』
23.08	門												『校録』
24.03	民											③	『校録』
24.05	厂												『校録』 は違うとする
24.07	氏												『校録』
24.19	畐											③	『校録』
24.24	系												『校録』
25.05	虫											対象外	『考異』『校録』
25.06	蚰											対象外	『校録』
25.07	蟲											対象外	『校録』
25.09	它												『校録』
26.09	男											③	『校録』
26.10	力											③	『校録』
26.11	劦											③	『校録』
28.08	亞											②	『校録』
28.10	六											③	
28.11	七											(iii)	『校録』
28.14	罾											⑤	『校録』

部首番号	隷定	汲本	岩本	岩15	述本	述29	述31	鉄31	祁本	祁29	祁31	糸原調査・篆韻譜	先行研究
28.18	丁												『校録』
28.33	卯											③	
28.42	亥											②	

i) 『篆韻譜』10 巻本は「畫」(06.16)は 2 回示し若干異なる。左は巻 7 去声 13 卦部(乎桂反)、右は巻 10 入声 5 麥部(界也)。
ii) 『篆韻譜』10 巻本は「殺」(06.17, 巻 9 入声 14 黠部)に相当する文字がなく、現行の小徐本が古文とする「殺」を篆文とする。
iii) 『篆韻譜』10 巻本の「毌」(12.08, 巻 10 入声 6 陌部)は「七」(28.11, 巻 9 入声 9 質部, 親吉反)のような字形であるが、「艸葉」と注記されるので、この文字が対応すると思われる。参考のため糸原氏が特に言及しない「七」の篆韻譜字形も示す。
iv) 『校録』は『篆韻譜』10 巻本の「飛」に似た字形を示すが、出所や字形差について報告していない。

謝辞

本研究は科研費課題番号 24500116, 26330377 の補助を受けました。また、高久由美先生、大西克也先生、高橋由利子先生、坂内千里先生、東ヶ崎祐一先生に大変有益な議論と示唆を頂きました。ここに御礼申し上げます。

参考文献

[1] TCA and China: ISO/IEC JTC1/SC2/WG2 N4634, “Proposal to encode Small Seal Script in UCS”, 2014-09-30.
[2] China: ISO/IEC JTC1/SC2/WG2/IRG N1119, “Old Hanzi Samples from PRC”, 2005-05-18.
[3] China: ISO/IEC JTC1/SC2/WG2/IRG N1139, “References on Old Hanzi”, 2005-05-25.
[4] TCA and China: ISO/IEC JTC1/SC2/WG2 N4688, “Proposal to encode Small Seal Script in UCS”, 2015-10-20.
[5] 福田襄之介: 『中国字書史の研究』, 明治書院(1979).
[6] 賴惟勤監修、説文会編: 『説文入門』, 大修館書店(1983).
[7] 周祖謨: 『問学集』, 中華書局(1966), p.710-884.
[8] 王貴元: 「《説文解字》版本考述」, 古籍整理研究学刊, (1999), 第 6 期, p.41-43,34.
[9] 高橋由利子: 「『説文解字』毛氏汲古閣本について」, 汲古, 第 27 号 (1995), p.27-38.
[10] 高橋由利子: 「段玉裁の『汲古閣説文訂』について」, 中国文化(55) (1997), p.37-52.
[11] 王獻唐: 「説文繫傳三家校語抉録」, 山東省立図書館, 季刊第 1 集, 第 1 期 (1931), 校勘 p.1-70.
[12] 坂内千里: 『経部引用書から見た「説文解字繫傳」注釈考』, 大阪大学出版会(2014).
[13] 邵敏: 「徐鍇《説文解字繫傳》版本考」, 信陽師範学院報第 27 巻, 第 6 期, (2007.12), p.92-95.
[14] 倉田淳之助: 「説文展観余録」, 東方学報・京都, 第 10 冊・第 1 分 (1939), p.145-154.
[15] Old Hanzi Expert Group: ISO/IEC JTC1/SC2/WG2/IRG N1836, “Report from the Old Hanzi Expert Group”, 2012-02-23.
[16] 段玉裁: 『説文解字注』, 経韵楼(1815).
[17] 段玉裁: 『汲古閣説文訂』, 五硯楼(1797).
[18] 高久由美: 「『説文解字』祖本への接近(上)」, 県立新潟女子短期大学研究紀要, 第 36 集(1999), p.129-138.
[19] 福田哲之: 「唐写本『説文解字』口部断簡論考」, 書学書道史研究 (2003), 第 13 号, p.43-53.
[20] 東ヶ崎祐一: 「『説文解字繫伝』反切校勘記(1)」, 東北大学言語学論集(17), (2008), p111-137.
[21] 東ヶ崎祐一: 「『説文解字繫伝』反切校勘記(2)」, 東北大学言語学論集(18), (2009), p59-88.
[22] 汪憲, 朱文藻: 『説文繫傳考異』, 四庫全書珍本九集 088, 台湾商務印書館(1978).
[23] 朱文藻: 『重校説文繫傳考異』, 八杉齋(1882).
[24] 承培元: 『説文繫傳校勘記』, 華文書局影印「説文解字繫傳」(1971)附録, p.1367-1504.
[25] 王筠: 『説文繫傳校録』, 廣文書局影印(1972).
[26] 田呉炤: 『説文解字二徐箋異』, 田氏刊行石印本(1910).
[27] 郭子直: 「王筠許瀚両家校批祁刻『説文解字繫傳』讀後記」, 陝西師範大学学報(哲学社会科学版), (1989), p.71-75.
[28] 吉田早恵: 「『説文解字篆韻譜』伝本考」, 中国語学 (234), (1987) p.1-10.
[29] 工藤早恵: 「十巻本『説文解字篆韻譜』について」, 東京都立大学人文学報, 213 号(1990), p.49-63
[30] 糸原敏章: 「張次立による『説文解字繫傳』の校訂について」, 東京大学中国語中国文学研究室紀要(12), (2009).
[31] 王珏: 「宋代《復古編》”規範”小篆字形対元明清篆書的影响」, 文化学刊 (2013), 第 6 期, p.159-163.

ⓒ 2016 Information Processing Society of Japan